

大伴家持と〈なでしこ〉の歌

島 田 裕 子

さらに、

大伴宿禰家持、同じ坂上家の大嬢に贈る歌一首

なでしこ（石竹）がその花にもが朝な朝な手に取り持ちて恋ひぬ日なけむ
（三・四〇八 家持）

佐保大納言家の嫡男大伴家持は、その青春時代に多くの相聞往来の歌がある。家持の相聞歌に〈なでしこ〉の花を素材に詠んだものがあるが、家持は〈なでしこ〉を特に愛でて万葉歌人の中では一番多くなでしこの花を詠んでいる。以下、家持の〈なでしこ〉の歌を中心として、〈なでしこ〉が歌語として成立していく過程を追っていく。

大伴宿禰家持、坂上家の大嬢に贈る歌一首

我がやどに蒔きしなでしこ（瞿麦）^{注1}いつしかも花に咲きなむ
なそへつつ見む
（八・一四四八 家持）

右の歌は、家持のもつとも初期の天平四年から五年頃の作で、また彼が初めて詠んだ相聞歌である。なでしこの花への愛着は、この歌を初めとして青春時代からその後も一貫して変わらない。この歌は、なでしこの花を妹と見なして眺めていようという、十五歳〜十六歳の少年の初々しい相聞の歌である。後に妻となる坂上大嬢に贈っていることも幸せな青春の始発と考えられよう。^{注2}

大伴家持と〈なでしこ〉の歌

これも同じ時期に坂上家の大嬢に贈られた相聞歌である。なでしこの可憐な花とまだ幼さを残した大嬢の容姿が重なって清潔な抒情と懂れが歌われている。二人の相聞往来は、大伴家の基盤を固めるために叔母坂上郎女等によって取り決められたものと思われる。坂上郎女は弟の稻公と継子田村大嬢との縁を取りもち歌を代作しており、また同族の大伴宿禰駿河麻呂と坂上二嬢を結びつけている。坂上郎女は、娘達と大伴一族の若い貴高子を結婚させることで大伴一族に求心的な核を作ろうとしていた感があり、家持と大嬢との結婚もそのような政治的色彩が強い。

しかし、坂上大嬢は家持が「いつしかも花に咲きなむ」、「はやく花に咲いてほしい」と詠んだように家持には幼なすぎたのであろう。この恋は、家持から三首の相聞歌が、坂上大嬢から四首の相聞歌が万葉集に残るだけで、一時途絶えてしまう。

この時期より笠女郎や山口女王、大神女郎、中臣女郎といった女性達との交遊が始まり、多くの相聞歌が家持に贈られている。笠や大神、中臣といった氏族の娘や皇族の血筋の山口女王といった身分の高い女性から相聞歌が寄せられてくるには、「容姿佳艶、風流秀絶、見る人聞く者、嘆息せずといふことなし」(二・一二六 左注)という、父族人と同母弟の叔父大伴田主の風貌を受け継いでいたであろうか、大伴家の嫡子家持は貴族の女性達の憧れの的であったようである。これらの氏族の郎女達は、各々に助動詞、助詞、序詞等、歌の作り方に独特の違いがあるのもおもしろい。この違いは単に個性と考えるよりも、氏族の歌の文化の様相の差も加わっていると捉えたほうがよからう。坂上郎女、大嬢、初期の持家の歌は助動詞、助詞の使い方に相通するものがあり、若い家持の歌い方は叔母坂上郎女の影響を脱していない。そういう視点で、笠郎女の歌を見ると、笠郎女が氏のような文化的蓄積の上にその才能を開化させたのかは興味のあることだ。この出色の歌人、笠郎女もまた、なでしこの歌を読む。

笠女郎、大伴宿禰家持に贈る歌一首

朝ごとに見るやどのなでしこ(瞿麦)が花にも君はありこそぬかも
(八・一六一六 笠女郎)

家持に贈った右の相聞歌は、家持が大嬢に贈った相聞歌に類似する趣きがある。このような歌い方、把え方がなでしこの花に一般的であったかと言うと集中では必ずしもそうではない。

山上臣憶良、秋野の花を詠む歌一首

①秋の野に咲きたる花を指折りかき数ふれば七種の花その一

(秋の雑歌 八・一五三七 山上憶良)

②萩の花尾花葛花なでしこが花(瞿麦之花)をみなへしまた藤袴朝顔が花その二
(八・一五三八 山上憶良)

③見渡せば向かひの野辺のなでしこ(石竹)が散らまく惜しも雨な降りそね
(夏の雑歌 一・一九七〇 作者未詳)

④野辺見ればなでしこが花(瞿麦之花)咲きにけり我が待つ秋は近付くらしも
(夏の雑歌 十・一九七二 作者未詳)

⑤隠りのみ恋ふれば苦しなでしこが花(瞿麦之花)に咲き出よ朝な朝な見む
(夏の相聞 十・一九九二 作者未詳)

典鑄正紀朝臣鹿人、衛門大尉大伴宿禰公の跡見の庄に至りて作る歌一首

⑥射目立てて跡見の岡辺のなでしこが花(瞿麦花)ふさ手折り我は持ちて行く奈良人のため
(秋の雑歌 八・一五四九 紀鹿人)

丹生女王、太宰師大伴卿に贈る歌一首

⑦高円の秋野の上のなでしこが花(瞿麦之花)うら若み人のかざししなでしこが花(瞿麦之花)

(秋の相聞 八・一六一〇 丹生女王)

右には、家持以前に詠まれたなでしこの歌を②～⑦まですべて挙げた。万葉集のなでしこは、中国から輸入された今の石竹せきしゆくではなく、夏から秋にかけて咲く和風の河原撫子であろうと諸家に言われている。『本草和名(上)』、『倭名抄十』に「瞿麥」「奈言志古」「奈天之古」とあり『倭名抄十』には「二云度古奈都」ともある。河原撫子は茎は高さ五〇cm、茎も葉もやや白っぽい緑色で、花は夏から秋に

かけて咲く。花卉の先は深く糸のようにさけて美しく、一般にうす紅色の花である。①、②の憶良の秋の七草の歌では、なでしこは秋の花となつてゐる。しかし卷十の作者未詳歌では、夏の花となつてゐる。また③、④では秋の花となり、万葉集では、なでしこは、秋の花とも夏の花とも定まつてゐない。表記も、瞿麦なでしこ、瞿麦之花なでしこがはな、瞿麦花なでしこがはな、石竹なでしことある。ちなみに、卷十では、なでしこを採る夏の部立には、その他に、花橘、あふち、藤、卯の花、葛、未摘む花の植物が詠まれてゐる。また、秋の歌にはなでしこはない。加えて卷十の「秋の雑歌」「秋の相聞」には、萩、葛、朝顔、尾花、をみなへし、萩、浅茅、黄葉、早稲、すすき、韓藍、月草、かほ花等の植物が詠み込まれてゐる。なでしこは、これら多くの草花の一つにすぎず、その中から家持は恋の歌の素材に特になでしこを選び出したのである。家持以前に恋の歌に詠み込まれたなでしこは⑤と⑦しかなく、その他のなでしこの歌は雑歌である。相聞歌の詠物として一般的ではない。家持のなでしこの歌は、⑤の作者未詳歌や、⑦の丹生王女の歌——父旅人へ贈られた相聞歌で、女王の旅人への思いが若々しく可憐な恋情として歌われている——の、二首の趣きを下敷に作られてゐる。特に⑤の作者未詳歌「隠りのみ恋ふれば苦しなでしこが花（瞿麦之花）に咲き出でよ朝な朝な見む」は、天平四・五年の家持の相聞歌「なでしこ（石竹）のその花にもが朝な朝な手に取り持ちて恋ひぬ日なけむ」（三・四〇八）に類似表現と発想がありその影響は濃い。そして家持の四〇八歌では、なでしこの花を「手に取り持ちて」、愛でいつくしまない日はないであろうと、なでしこと撫でし子の言葉の響きを掛けて用ゐる発想の端初はなはが仄見え

る。なでしこに対するこの掛け詞の発想は、家持の発見と言えよう。家持以前の歌も、初期の家持の歌も、「瞿麦」か「石竹」であるのが、家持の歌日誌と言われる卷十七以降は、「奈泥之故」「奈三之故」「那泥之古」と音を大切に表記してゐる。撫子という表記こそないが、末四卷に「黄葉」や「橘」といった表記があるにもかかわらず、瞿麦や石竹から奈泥之故などの一字一音の表記に定着するのは、この花のもつ言葉の響き、意味の重層性を家持が、愛でていたと考えられる。なでしこが、相聞歌の歌語として定位していくには、家持個人のなでしこへの愛着があつた。これらは、笠女郎作の八・一六一六歌や亡妾悲傷挽歌の三・四六四歌、紀女郎への相聞歌八・一五一〇歌と広がり、さらに越中歌壇の宴席歌と波及していく。なでしこは集中二十六首中、家持は十首を詠み、家持周辺の人々の作歌が八首であり、大半を占める。ほととぎすが、家持の著しい愛着で歌語となつたように、なでしこも家持という一人の歌人の好みや、歌の素材として定着させ、後々、その把え方をも方向付けて歌語と熟す基点となつてゐるのである。

二

家持がその青春期に相聞往来した女性性は数多い。それが天平貴族の日常なのか、家持が特別であつたか、万葉集の資料が家持を中心に偏つてゐるため計りがたい。青春期の家持に相聞歌を贈つた、或いは贈られた女性を挙げると次のようになる。

坂上大嬢(1)

笠女郎

山口女王

大神女郎

中臣女郎

娘子(A)

河内百枝娘子

巫部麻蘇娘子

日置長枝娘子

(妾)

娘子(B)

童女

粟田女娘子

娘子(C)

坂上大嬢(2)

紀女郎

娘子(D)

安倍女郎

平群氏女郎

この相聞往来歌群の中で、坂上大嬢、紀女郎、娘子、亡妾を除いては家持からの相聞歌は少なく、ほとんどが女性からの相聞歌だけが残っている。家持はその青春時代では、相聞歌の中でのみ、なでしこの花を詠む。彼の青春時代のなでしこの歌を(一)に続いて追ってみよう。

また家持、砌の上のなでしこが花(瞿麦花)を見て作る歌一首
秋さらば見つつしのへと妹が植えしやどのなでしこ(石竹)咲

きにけるかも

(三・四六四 家持)

天平十一年六月の亡妾悲傷挽歌群の一首である。妾の存在は、突然次の亡妾悲傷挽歌より歌い起こされる。

十一年己卯夏六月、大伴宿禰家持、亡ぎにし妾を悲傷びて作る歌一首

今よりは秋風寒く吹きなむをいかにかひとり長き夜を寝む

(三・四六二 家持)

弟大伴宿禰書持即ち和ふる歌一首

長き夜をひとり寝むと君が言へば過ぎにし人の思はゆらくに

(三・四六三 書持)

と、家持の歌に和して弟書持が亡き人を偲ぶ。そして前述の四六四歌のなでしこの花の歌が続く。一つまた一つと歌い出される亡き妾への思いは次第に溢れ出て、長歌一首、反歌三首、さらに短歌五首へと続いて詠まれる。この妾の存在を疑われた中西進^持氏の説がある。が、弟書持の歌もあり、みどり子の存在も、後に藤原仲麻呂の二男久須麻呂と家持の幼い娘との婚姻^注に関わる歌(四・七八九〜七九二)があることで実在したと考えられる。またこの間数年、坂上大嬢との仲が途絶えていた奈良時代の貴族は正妻は親が決める。その他に妻がいるのは一般的であった(青木和男「日本の歴史3 奈良の都」という。それ故、家持が天平十一年、二十二歳で妾と記す女性を亡くしたとしても決しておかしくはない。

妾と後に記される女性への歌は家持の相聞歌群には見当たらない。しかし、先の表の娘子(A)にある一首、

大伴宿禰家持、娘子に贈る歌一首

もしもきの大宮人はさにはあれど心に乗りて思ほゆる妹

(四・六九一 家持)

うはへなき妹にもあるかもかくばかり人の心を尽くさく思へば

(四・六九二 家持)

や、巻四に散在する娘子へ贈る歌の中に混じっているのかもしれない。巫部麻蘇娘子や日置長枝娘子らの歌が天平七、八年から天平十一年にかけての作と歌の配列から推測される点で、先の娘子への歌も配列上その期間のものと考えられる。なぜ一方は名を記し、他方は名を記していないのか。妾にはなぜ名が記されていないのか。これは妾が家持の内舎人時代に交際した若い女官達の一人であり、彼女達は郎女や女王ほど身分の高い出身ではなく、あえて名を記す必要はない出自であったこと。また、後に妻となる坂上大嬢への配慮もあり固有の名で記さなかったのではないか。むしろ固有の名で記さなかった娘子のほうが名を記した娘子達よりも特別な存在であったとも考えられる。家持の中でいろいろな配慮があって、ぎりぎりのところで残されている挽歌と言つてよいだろう。

例えば、笠女郎と家持の二つの歌を見つみよう。

○ 笠女郎、大伴宿禰家持に贈る歌

奥山の岩本首を根を深めて結びし心忘れかねつも

(三・三九七 笠女郎)

○ 大伴宿禰家持が歌一首

あしひきの岩根こごしみ昔の根を引かば難みと標のみそ結ぶ

(三・四一四 家持)

この二首は巻三の譬喩歌に収集されている。配列は離れており、家

大伴家持とへなでしこの歌

持の四一四歌は譬喩歌の最後に置かれている。が、この二首には、「奥山の岩本首を根を深めて」「あしひきの岩根こごしみ昔の根をひかば」、また「結びし心」「標のみそ結ぶ」と、言葉、表現の面から響き合うものがあり、もともと二人の相聞往来歌ではなかったのだろうかと思わせる。それを家持がなんらかの配慮から分けて、自分の歌を譬喩歌の末尾に置いたのではないかと推測もできる。このように元は相聞往来の歌が、解体された形で配列されているとも考えられる例もあるので、妾への歌も散在して配列されているのかもしれない。

また、この妾が家持の風雅な心をよく理解する人であったことは、挽歌の中で知ることができる。「秋さらば見つつしのへと妹が植えしやどのなでしこ(石竹)咲きにけるかも」(三・四六四)と、家持が詠んだ歌の中に、妾が家持の風流がりをよく理解し、それを一緒に楽しむことができる教養の持ち主であったことが窺える。死ぬべき身であることをすでに覚った彼女が、秋になったら私と思つて唄んでほしいとなでしこを植えた心ばえと機知とは、若い家持の心に深く刻まれていっただろう。この妾との思い出もあり、なでしこの花への愛着は、家持の中でいっそう深まっていたと思う。

亡妾挽歌が詠まれた天平十一年六月から数カ月後に坂上大嬢との交際が復活される。これはなによりも妾という存在が、家持と坂上大嬢との間柄を疎遠にしていたことを物語るものではないか。ところが、家持は、坂上大嬢との中を復活した後も、紀女郎やまた娘子とだけ記してある女性あるいは女性達と相聞歌をかわしている。特に娘子(C)にある七首の熱烈な相聞歌と娘子(D)の歌のつなが

りは気になるものである。娘子（C）の

心には思ひ渡れどよしをなみよそのみにして嘆きそ我がする

（四・七一四 家持）

ますらをと思へる我をかくばかりみつれにみつれ片思ひをせむ

（四・七一九 家持）

むらきもの心砕けてかくばかり我が恋ふらくをしらずかあるら

（四・七二〇 家持）

等の歌や、娘子（D）の

一昨年をとしの先つ年より今年まで恋ふれどなぞも妹に逢ひかたき

（四・七八三 家持）

となびかぬ妹子への片思いが数年以上続いていることがわかる。一

方で、坂上大嬢との結婚が二人の情熱的な相聞歌のやりとりで進み

落ち着いていこうとしている頃、他方で家持には片思いのかなり執

心した娘子がいる。

亡妾挽歌を詠んで数カ月後に坂上大嬢との縁が復活するのだが、

これは八月に家持が竹田の庄へ坂上郎女に会いに行く（八・六一

九―一六二〇の題詞及び左注）ことから始まる。家持は、いろいろ

な状況から考えて正妻には坂上大嬢が最も適しているとかねてから

決めていたのであろう。そして九月、妙齢となった坂上大嬢との交

際が復活する。橋本達雄氏は、亡妾挽歌を「妾の死をきっかけとし

て、家持が青春の彷徨・遍歴に終止符をうつべく想を練り、創作し

た、いわば『青春の挽歌』であった」（『大伴家持作品論攷』）と言

われる。家持のとつた行動は、氏の言われるような決意に基づいた

ものと考えられる。しかし、亡妾への思いがそこですべて立ち切ら

れたわけではなく、むしろあまりに早すぎる復縁だったために、家

持の決意とは裏腹に妾の面影を無意識にたどるように同じような出

自の娘子へと片思いをつのらせていったのではないか。家持と坂上

大嬢との復縁から結婚という期間に並行して、「一昨年の先つ年よ

り」ずっと恋ひ続けていると詠まれた娘子の存在に、亡妾への立ち

切れない思いが反映していると考えるのは穿ち過ぎてあろうか。

さて、話を戻そう。青春時代に、もう一人家持からなでしこの花

にたとえられた女性がいる。紀女郎。安貴王の妻で、安貴王の八上

采女事件後、「怨恨の歌」を詠む。天平十一年以後、年下の家持と

の歌の贈答がある。薦たけて、かつ繊細、冷静な視点に裏打ちされ

た歌は、一脈、坂上郎女の歌と相通ずるところもある。家持が紀女

郎へ贈ったなでしこの歌は次の歌である。

大伴家持、紀女郎に贈る歌一首

なでしこ（瞿麦）は咲きて散りぬと人は言へど我が標めし野の

花にあらめやも

（八・一五一〇 家持）

このように、なでしこは家持の青春時代の恋愛を刻み込んだ相聞

歌に、特別の花として詠まれた。やがて越中国守として北陸に赴任

するのだが、二十九歳の国守赴任を境に家持はその青春を閉じてし

まう。なでしこの花は、越中では宴席の歌として再び登場する。

三

家持は天平十八年閏七月、越中国守に任じられ、单身京を後にす

る。越中では、家持を中心に盛んに宴がひらかれ宴席歌が詠まれた。

京から来た国司達、介内藏忌寸繩麻呂、掾大伴宿禰池主、大目秦忌

寸八千鳥、小目奏伊美吉石竹（伊波太氣）等は、ともに越中であつて望京の思いを抱いていたので、国守家持を中心に越中歌壇とも言うべく盛んに宴が開かれ歌が詠まれた。中でも掾大伴池主に越中で出会えたことは、家持にとつて幸運なことであつた。池主との歌のやりとりは、宴席を越え、さわめて熱心に集中的に行われる。

天平十九年四月家持は税帳使として京へおもむく。その道中池主に宛てて「京に入ること漸く近づき、悲情撥ひ難くして、懐を述ぶる一首并せて一絶」と長歌、短歌を贈る。池主はその返歌に「忽ちに京に入らむとして懐を述ぶる作を見るに、生別は悲しく、断腸万回にして、怨緒禁め難し。聊かに所心を奉る一首并せて二絶」の長歌一首、短歌二首を和へ贈る。「……君がただかを ま幸くもありたもとほり 月立たば 時もかはさず なでしこ（奈泥之故）が花の盛りに 相見しめとそ」（十七・四〇〇八）と詠み、続けて池主は

うら恋し我が背の君はなでしこ（奈泥之故）が花にもがもな朝
な朝な見む
（十七・四〇一〇 池主）

と詠む。この歌は、卷十の作者未詳歌「穩りのみ恋ふれば苦しなでしこ（瞿麦）が花に先出よ朝な朝な見む」（十・一九九二）を基底にしている。卷十のなでしこの相聞歌は、前述した家持の青春時代の相聞歌、笠女郎の相聞歌にも影響を及ぼしているが、池主の歌においても同様に本の歌となつたと考えられる。しかし、家持や笠女郎においては恋の相聞歌であつたものが、池主においては恋の歌の形を取りながら、家持との友情を述懐する歌となつている。池主は、先に新任国守家持を迎えての宴席で、次のような歌を残している。

大伴家持とへなでしこの歌

をみなへし咲きたる野辺を行き巡り君を思い出たもとほり来ぬ

（十七・三九四四）

と、相聞歌に似せて茶目つ気のある歌を家持に贈っている。池主は、このような戯れの恋歌に寄せて、自らの真情を伝えているという機知に富んだ表現手段をよくものとしていたのである。四〇一〇歌でも、家持の好きななでしこの花を素材に、相聞歌の形をとりつつ、家持の悲情をしっかりと受け止めている。

ところで、家持のなでしこへの愛着は、ほととぎすほど極端ではないが、庭になでしこを植え賞玩するといった相当に著しいものである。家持は、庭の花を詠んだ長歌になでしこを次のように歌い込んでいる。

庭中の花の作歌一首并せて短歌

大君の 遠の朝廷と 任きたまふ 官のまま み雪降る 越に
下り来 あらたまの 年の五年 しきたへの 手枕まかず紐解
かず 丸寝をすれば いぶせみと 心なぐさに なでしこ（奈
泥之古）を やどに蒔き生ほし 夏の野の さ百合引き植えて
咲き花を 出で見るごとに なでしこ（那泥之古）が その花
妻に さ百合花 ゆりも逢はむと 慰むる 心しなくは 天難
る 鄙に一日も あるべくもあれや （一八・四一一三 家持）
反歌二首
なでしこ（奈泥之故）が花見るごとに娘子らが笑まひのほひ
思はゆるかも （一八・四一一四 家持）
さ百合花ゆりも逢はむと下延ふる心しなくは今日も経めやも
（一八・四一一五 家持）

奈良に残してきた妻坂上大嬢を恋しく偲ぶ思いとなでしこの花が重なり、「那泥之古我曾乃波奈豆未尔」と、「左由理花由利母安波無等」の百合と後を意味する「ゆり」を掛け詞としたように意味の重層性を意識しつつ読み込んでゐる。家持は単になでしこの花の姿を愛でただけではなく、その言葉のもつ響きとイメージの広がりが重層性を好んでいたと考えられる長歌と反歌である。このような国守の好みをいち早く理解したのが、先の池主の歌である。

このようにしてなでしこは越中歌壇では多様に詠まれる。

庭中の牛麦が花を詠む歌

一本のなでしこ（奈泥之故）植ゑしその心誰に見せむと思ひそめけむ
（一八・四〇七〇 家持）

右、先の国師の従僧清見といふもの、京師に入るべく、因りて飲饌を設けて饗宴す。ここに、主人大伴宿禰家持この歌詞を作り、酒を清見に送る。

家持が饗宴の席で、主客僧清見に贈つた歌。なでしこが、家持の清見への心をこめた挨拶のキーワードとなつてゐる。

またさらに、天平勝宝三年の正月、国守館での集宴で、

なでしこ（奈泥之故）は秋咲くものを君が家の雪の厳に咲けりけるかも
（一九・四二三一 久米広縄）

雪の山斎厳に植ゑたるなでしこ（奈泥之故）は千代に咲かぬか君がかざしに
（一九・四二三二 遊行女婦蒲生娘子）

と、風流な趣向とともになでしこが詠まれる。国守家持のなでしこへの好みは影響して、越中歌壇では風雅な花として歌い重ねられていく。

これは帰京して後の宴席歌にも反映する。

五月九日に、兵部少輔大伴宿禰家持の宅に集飲する歌四首
我が背子がやどのなでしこ（奈豆之故）日並べて雨は降れども色は変はらず
（二十・四四四二 大原真人今城）

ひさかたの雨は降りしくなでしこ（奈豆之故）がいや初花に恋しきが背
（二十・四四四三 大伴家持）

今城の歌に対して、家持は今城への心のこもつた挨拶として、相聞歌の形をとつて「なでしこの初花のように恋しく思われたあなただ」（『日本古典文学全集・万葉集』）と詠む。宴席の場ならでは、当意即妙に詠まれた歌である。

また、左大臣橘諸兄を主客とした宴席では、

同じ月十一日に、左大臣橘卿、右大弁丹比国真人の宅に宴する歌三首

我がやどに咲けるなでしこ（奈豆之故）略はせむゆめ花散るな
いやをちに咲け
（二十・四四四六 丹比国真人）

略しつづ君が生ほせるなでしこ（奈豆之故）が花のみ訪はむ君ならなくに
（二十・四四四七 橘諸兄）

丹比国真人がなでしこに事寄せて左大臣を寿いで詠めば、左大臣は主人国真人の好意に應えて「なでしこが花のみ訪はむ君ならなくに」と敬意をこめた挨拶の歌を詠む。

さらに左大臣が兵部卿橘奈良麻呂の宅で催した宴席では次のようになでしこの歌が詠まれる。

十八日に、左大臣、兵部卿橘奈良麻呂朝臣の宅にして宴する歌三首

なでしこ(奈弓之故)が花取り持ちてうつらうつら見まくの欲
しき君にもあるかも
(二十・四四四九 船主)

我が背子がやどのなでしこ(奈弓之故)散らめやもいや初花に

咲きは増すとも

(二十・四四五〇 家持)

愛しみ我が思ふ君はなでしこ(奈弓之故)が花になそへて見れ
ど飽かぬかも
(二十・四四五一 家持)

右の二首、兵部少輔大伴宿禰家持追ひて作る。

左大臣、橘諸兄を寿いで船王は相聞歌の形をとつて歌う。また、この宴席には列席しなかつたが、家持もなでしこの花にたとえて左大臣を寿ぐ歌を追つて詠む。これも相聞歌の様式をとつて諸兄に敬愛の気持ちを表明する。

このような越中時代の池主の私信より始まった歌い方は、帰京後も家持に閨わりのある人々との宴席歌で歌い継がれる。恋の歌の形をとつて少々大袈裟に相手に忠誠や敬愛の気持ちを示す宴席歌が詠まれる。家持の青春時代には、なでしこの歌は相聞歌として愛しい女性に贈られていた。なでしこの花の可憐さを愛しい人に重ね、またなでしここという言葉の響きがもつ意味の重層性から、相聞の歌語にまで結実させたのは家持という歌人の力であった。そして越中や京では宴席という場で、機知と戯れを加えつつ、社交的な挨拶性^{注6}を濃くして享受され詠まれていく。

以上、なでしこの歌を例にとり、なでしこが、瞿麦の薄紅色の花から愛するいとおしい人という意味まで含み込んだ歌語にまで結実していく過程を追ってきた。その生成の過程は家持というきわめて抒情的な歌人の存在を抜きにしては考えられず、彼の個人的な

大伴家持となでしこの歌

好みと思入れが強く反映している。そして、家持を中心にその周辺の人々に浸透していく在り様をこの小論では追つていった。次いでなでしこの相聞歌が、宴席の場で相聞歌の形をとりつつも、社交的な挨拶歌と変化していく様相も検証した。宴席の場では、相聞歌の形をとつた挨拶歌は、大仰な表現ながら機知とおもしろみがあり、相手への敬愛の気持ちが強く押し出されるため、好んで受容されていたのである。そこに天平貴族の爛熟した風雅の一端も窺える。なでしこの歌の有り様には、一つの歌語が生成されていく基点と展開、私的な相聞歌から宴席歌へと場の変化の相を見ることができるのである。

注1 なでしこの表記を示す。

注2 小野寛『大伴家持研究』△「なそふ」考

注3 澤瀉久孝『万葉集注釈・巻第三』

注4 巫部麻蘇娘子の歌は、巻八に天平八年九月以前と、天平十一年八月以降にあり、その相聞往来は亡妾挽歌を挟んで数年間続いていたらしい。巻八の配列から巻四の巫部麻蘇娘子の歌の作歌年月が天平八年から十一年八月まで揺れる。

注5 中西進『万葉集の比較文学的研究』

注6 小野寛『大伴家持研究』

橋本達雄『大伴家持作品論攷』

注7 小野寛氏は前掲書で娘子を女官と指摘する。

注8 鈴木日出男『古代和歌史論』